

『共鳴する診断のアート』

超音波を最大限に活かす臨床医の役割』

医療法人明雅会 こだま小児科
児玉和彦

現代の医療において、超音波検査は侵襲性が低く、診断性能が高いため広く導入されている医療技術である。特にCT検査と比較した際、その苦痛や放射線被爆の少なさが強調されるが、小児患者においては皮下脂肪が薄く超音波が効率よく届き、検査として有効性が非常に高い。超音波検査をChatGPTなどのAI技術と組み合わせて、ルーチンワークとして取り入れていけば、我々は、臨床現場が大きく変貌を遂げる未来に出会うと予想される。

今回の講演は、20年後の未来に目を向けて、ルーチン化され、AI化されていく超音波検査と、臨床医としての我々の知識や直観がどのように相互作用し、協力していくのかについて考える機会としたい。

一部アレンジした症例として、以下を提示する。

中学3年生の男子。主訴：手の震えと頻尿。現病歴：半年くらい前から授業で発表しようとする手が震えて話せない。書字は可能であるが、頻尿がある。近医内科で血液検査をして異常なし、泌尿器科にも受診したが原因不明であるため当院受診した。既往歴特記なし。内服歴なし。

この症例を考えると、どのように診断プロセスをイメージするだろうか。それを通して、臨床医の役割としての経験からくる直観や患者のコミュニケーションからの洞察に加え、人が人に触れるという五感を使った診察がすべての診断プロセスに不可欠であり、稀な疾患に対しても強みがあり、患者それぞれの個別性に深くアプローチすることの重要性を強調する。また、人間が行う検査としての超音波の限界にも言及する。

短い講演時間であるが、未来の医療現場で、テクノロジーと人間の技の融合、つまり、機械と臨床医が互いの強みを活かしながら、患者にとって最良の医療を提供するための方策について「臨床医視点で」共有することによって、未来に向けた議論の一助となることを期待する

【略歴】

京都大学医学部卒業。内科医としてキャリアをスタートし、家庭医療専門医、小児科専門医と学びを広く、深くしてきました。すべての患者さんから学ぶ姿勢を忘れずに努力を続けたいと思います。病歴聴取と身体診察のスキルを極めることに興味のあるかたは、HAPPYというワークショップを開催していますのでともに学びましょう。著書：「症状でひらめく こどものコモンディーズ診察が楽しくなる！ 面白くなる！ 病歴聴取と身体診察のコツとヒケツ」など。